

学会誌投稿論文の査読方針について

出版委員長 関根嘉香

出版委員会（旧・編集委員会）は2007年に「室内環境学会誌」から「室内環境」に名称変更し、会誌デザインの変更、定期刊行物としてISSNナンバーの取得、原稿区分の変更、著者への査読者名の開示などの改革を行いました¹⁾。また査読過程においては「迅速かつ丁寧な著者への対応」を旨とし、査読担当委員が著者と査読者の両者の意見に耳を傾けて中立的立場で投稿論文の採否を決定する方針で取り組んでまいりました。当初、第10～11巻（2007～2008年）では誌面の多くを総説・解説、室内環境学関連情報などが占めておりましたが、第12巻2号（2009年）より会員から投稿された原著論文の掲載数が顕著に増加し、年2回の定期刊行を定着させることができました。この間、ご査読に多大なご尽力を頂いた先生方にはこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

表・「室内環境」誌における原稿区分別論文数の推移

巻号	総説・解説・講座	原著論文	調査・技術資料	室内環境学関連情報	不採用
10巻1号	6	0	1	1	0
10巻2号	1	2	4	1	0
11巻1号	0	2	1	3	1
11巻2号	3	3	1	0	0
12巻1号	0	0	1	1	0
12巻2号	2	5	1	0	0
13巻1号	2	3	1	1	0
13巻2号	0	6	0	1	1
14巻1号	1	3	1	0	1

さて、学会誌の学術的価値は、引用頻度の高い「優れた論文」を多く掲載することによって高まり、査読過程で「優れた論文」のみを厳選して掲載することが最も合理的です。しかし学際的な本学会の場合、「優れた論文」の審査基準は一定ではないかもしれません。また論文の真の価値を決めるのは査読者ではなく、掲載された論文を読む読者（会員その他）であり、時間が経つことによって評価が高まることもあるでしょう。したがって出版委員会では、出来るだけ多くの論文を掲載し、その中から「優れた論文」が生み出されることを意図して、今後も「Rejectすることが目的ではなく、Acceptするにはどこを修正したらよいか」を助言する姿勢で査読を心がけていきます。

このような査読方針で臨むにあたり、本学会では査読過程において「著者への査読者名の開示」を行ってきました。査読者名の開示には多くの意見があります。過去4年間実施した中で、著者からは「査読者の学術的背景がわかるため指摘の意図が理解しやすい」「丁寧で建設的な査読意見を受けられる」「問題点の指摘だけでなく、具体的な修正の指示をもらった」などの概ね好意的な感想を頂き、また査読者からは「責任を持って査読に取り組む姿勢が強まった」「丁寧な言葉遣いを意識して使うようになった」などのコメントが寄せられています。このことから、査読者名の開示は、匿名性を利用した威圧的・放言的な査読意見を排除し、論文の質の向上に寄与する有益な査読意見を引き出すことに関しては一定の効果があったと思われる、投稿論文数の増加にも寄与したと考えられます。

一方、このシステムに対して批判的意見もあります。その多くは、著者と査読者間に利害関係があった場合、適正な審査が行えるのかという疑問に起因します。例えば、著者との研究上・商取引上の関係で審査が甘くなる、研究上の競争関係で過度に審査が厳しくなる、著者が査読者に非公式に接触する、などの可能性が指摘さ

れています。もし本当にこのような事態があれば学会誌の権威を失墜しかねません。またこのシステムの存在自体が学術的価値に影響するとすれば大きな問題です。さらに、因果関係は必ずしも明確ではありませんが、完成度の低い論文が投稿されるケースが散見され、査読担当委員・査読者の大きな負担になっています。

本誌のように査読者名を開示している学会誌に*British Medical Journal (BMJ)*²⁾があります。*BMJ*では1999年よりRichard Smith編集長の方針のもと、査読者名の開示を実行し、本学会と同様の論争の中で、高いインパクト・ファクターを維持しています (IPF=13.66)。またEuropean Molecular Biology Organization (EMBO)の発行する4誌では、査読者名の公開はしていませんが、査読意見・査読意見に対する回答をすべてウェブ上に公開し、査読プロセスの透明性を図っています³⁾。*Nature*誌では、成功したとはいえませんが、投稿論文をウェブ上に公開して査読者およびコメントを公募する実験⁴⁾を行っており、査読プロセスの透明化は、学術・学会誌のこれから進むべき方向の一つと考えられています。

そこで、2011年度からの出版委員会では、査読者名開示のメリットを維持しつつ、学会誌の権威・学術論文の価値をより一層高めるために、次の査読方針で臨みます。

- (1) 出版委員会は、迅速かつ丁寧な著者への対応を心がけます。
- (2) 出版委員長は、投稿論文を受け付けた後、出版委員の中から査読担当委員を決定します。ただし、投稿された原稿が、本学会誌のテーマにふさわしくない、投稿規定に従っていない、十分に推敲されていない、等の不備がある場合は、一旦著者に差し戻すこともあります。
- (3) 査読担当委員は、会員・会員外の有識者に査読を依頼し、査読者を決定します。原則として、原著論文・短報論文の査読は2名（必要に応じて3名）、調査資料・技術資料の査読は1名（必要に応じて2名）。総説・解説・講座および室内環境学関連情報については出版委員会にて査読します。
- (4) 査読者には、「Rejectすることが目的ではなく、Acceptするにはどこを修正したらよいか」を助言する姿勢で査読を依頼します。
- (5) 査読の回数は原則2回とします。
- (6) 原著論文の価値を維持するため、原著論文として投稿された論文の場合、査読の結果、改善が認められないときは、カテゴリーの変更を求めることがあります。
- (7) 投稿論文の採否は、査読担当委員が中立的立場で行います。ただし、査読担当委員が判定困難な場合には、出版委員会にて査読経過を精査し、判定します。
- (8) 査読者名は、査読中は著者に開示せず、査読が終了し、最終判定が出た段階で著者に開示します。ただし、投稿論文が不採用になったとき、査読者の希望により著者に開示しない場合があります。
- (9) 査読過程で会員等に有益な意見が交換され、著者および査読者の同意が得られた場合は、査読意見および査読意見に対する回答の一部または全部を学会誌上またはウェブ上で公開する場合があります。
- (10) 論文が掲載された号の巻末に査読者のお名前を記して感謝の意を表します。不採用の場合でも、直近の号に記します（どの論文を担当されたかは記載しません）。
- (11) 査読者として本学会誌の発展に多大な寄与をされた方には、出版委員会より「感謝状」を贈呈いたします。

以上の方針のもと、「室内環境」誌をわが国の室内環境研究を先導する知的メディアとしてさらに発展させていきたいと思っております。会員の皆様からの積極的な投稿を心よりお待ちしております。

引用文献

- 1) 川上裕司, 編集委員会の編集方針と編集委員の紹介, 室内環境, 10(1), 85(2007)
- 2) Smith, R., Opening up *BMJ* peer review, *Br. Med. J.*, 318,4-5(1999)
- 3) Editorial, Peer review and fraud: Two assessments of the refereeing process highlight challenges for journals, *Nature*, 444,971-972(2006)
- 4) Pulverer, B., Transparency showcases strength of peer review, *Nature*, 468,29-31(2010)